森林樹木の稚苗圖説 (一一)

Y. Yanagita: Illustration of the Seedling of Forest Trees.

(昭和三年七月十五日受理)

柳田 由藏

第二三 しらかし *Quercus myrsinaefolia*, Bl. 殼斗科 Fagaceae

此種も亦子葉を地下に止むる種類にして、調査せる品種は長實のものなり。子葉は正しく二裂するも、果皮は必ずしも一定のヶ所に於て二裂するものにあらず、時に三裂するものあり、子葉は卵狀長橢圓形、頭部は二裂し、下部稍と圓し、子葉柄は上部の内側の部分に深く進入するも、アカガシの如く柄頭凸起を有せず、葉長一四—一五耗、幅六—七耗、厚三—三・五耗、柄長三—三・五耗あり、淡紫色時に紫色を呈するものあり、毛なし、子葉の頭部も淡紫色を帶ぶ、胚節明、軸は胚節以下三—五耗あり、莖と同じく紫色を帶ぶ、軸と根との界線明なるも後には殆ど不明となるも殆ど側根を生ぜず。莖は櫛類中の細き方に屬し、淡紫色又は暗紫色を呈し、一見黒色に見ゆ、一名クロカシの名是より起りしものか。莖には少許の毛あり、種子の大小に依り差あるも、莖長七〇—一〇耗(胚節より眞葉まで)あり。新葉は初めは對生に生じ、第三葉より互生葉となる、對生葉は胚節を去る三〇—五〇耗の所に生じ、多くの場合鱗片葉なり、第三葉及び第四葉は對生狀に接近して生ずることあるも、多くの場合少しく離るゝを常とす何れも眞葉にして葉形の基部に針狀の托葉を生ず、長二—二五耗にして毛を有す。葉柄は暗淡紫色又は暗紫色、白毛粗生す、葉片は長橢圓形若くは廣披針形にして漸尖頭、襖脚なり、白毛粗生するも、後脱落す、初め暗紫色又は淡紫にして漸次綠色に變ず、此櫛の最も特長とする所は葉腋葉片外に凸出して刺狀をなすにあり。根は軸との界線明にして、根は淡褐色を呈し、漸次褐色に變ず、主根著しく發達す、側根は細かく稍密に水平に出づ。

第一四 ならかし *Quercus aliena*, Bl. 殼斗科 Fagaceae

本樹も亦子葉を地下に止むる種類にして、調査せる母樹は林業試驗場見本園産のものにして、種子は短實の品種なり。甲柝の際果皮及び種皮(莖

皮)は不規則に割るゝも、胚は正しく二裂す。其一片即ち子葉は略々廣楕圓形に近く、先端は稍々平たく、基部即ち葉柄の附着する方面は、大體圓狀にして、二、三裂をなす。第一一四圖b是なり。當時は淡黃色にして、表面は扁平、背面は圓く、螺旋狀の凹線數條あり、子柄は淺く柄頭凸起僅かに之を認むるに過ぎず、長さ一七—一八耗、幅一三—一四耗あり、子柄は割合に長く微紅を帶び、表面廣き溝をなし、長一一—一二耗を算す。軸を有することなく、胚節線以下は即ち根部に屬す。莖は地下部は白色、地上部は淡綠色なるも、後地下部は褐色に變じ、地上部は漸次紅色を帶び地際は紅色を呈するものあり、毛を有するも多からず、新葉は初より互生にして且つ鱗片葉なるも、六—七葉目より眞葉を生ずるに至る。無論第一葉は鱗片葉にして胚節を去る五—六耗の所に生じ、第二、第三と間隔を以て配列し、一〇種附近の所に於て二、三の眞葉を開展するを常とす。葉は有柄(特)、齒牙緣、鋸頭尖る、毛は葉緣、葉表面、脈上及び葉裏脈上に粗生す、幼葉は微紅色を帶ぶるを常とし、表面の脈は特に紅色を帶ぶ、根は主根著しく、細毛根を密生せる側根は稍々水平に出づ(特)、故に根は密に見ゆ、根は淡褐色を呈す。

第一一五 みづなら *Quercus grosseserrata*, Bl. 殼斗科 Fagaceae

本母樹は九州霧島山産のものにして、林業試驗場技師河田杰君の採集に係り、一部余に分與せられたるものを、播種培養したるものなり、茲に特記して其の好意を謝す。此の品種は群馬縣輕井澤附近の品種と異にして、種子割合に小なり、即ち調査したる稚苗に附着せる果實は、長卵形にして頂尖り、長二〇耗、直徑一二耗のものなり、果實及び種皮は正しく二裂せざるも、子葉は正しく二裂す、其の形第一一五圖bの如く倒卵狀長橢圓形にして、子柄は稍々深く内部に進入するも、柄頭突起を有せず、柄は表面廣く僅かに凹み、帶黃色なり、子葉も亦淡黃色を呈し、柄の基部附近に於て微紅を帶ぶ、子葉長一七・五耗、幅一〇耗、柄長八耗あり。胚節明。軸は之を缺き、胚節下は即ち根の部分なり(特)。莖は地下部は白質淡色、毛多し、地上部は淡綠色白毛密布し、コナラに相似たり、但しコナラは紫色を帶び、是は微紫色を帶ぶるの差のみ、莖の高さ七〇種あり。新葉は初より互生なるも、精檢するに第一及び第二葉は正反對の位置にあり、其の距離僅かに一耗の差あるのみ、又第二、第三葉も亦正反對の位置にあり、其の距離僅少なり、之に依て之を觀るに、元來此の四葉は、コナラの如く二對の對生葉をなすものならんか。第五、第六、第七、第八等は純然たる互生葉にして、亦何れも鱗片狀の葉なり、第九葉目より眞葉に近きものを生し、三、四葉を群生して一旦生枝を休止す。葉は葉柄を有し、長さ一一・五耗を算す、且つ母樹の如く葉片の基部に耳形を顯はさず、大體倒卵形乃至卵狀長楕圓形、尖頭、鈍脚の葉にして其の羅甸名の示す如き粗らき鋸齒(*grosseserrata*)を具ふ、幼葉は側脈表面に凹み、脈間葉片は隆起し粗らき皺狀をなし、枇杷葉狀を呈

す。裏面の側脈は著しく隆起す、葉の表面には長白毛多く生ずるも葉脈上には短毛密布するのみにして長毛を有せず、葉の裏面には脈上のみ長毛生じ、葉肉部には稀に之を生ずるに過ぎず。根は胚節以下にして太き直根著しく發達し、短かき側根稍々水平に出て密生根をなす。

第一一六 さら さら *Quercus glandulifera*, Bl. 殼斗科 Fagaceae

本母樹は不明なるも、實は長實の品種なり。果實の徑一〇耗、長十八耗あり、本樹も又子葉を地下に止むる種類にして、子葉は長橢圓形、頂圓、基部二裂す、葉柄は稍々深く進入するも柄頭凸起を有せず、柄の表面は廣く凹み溝をなす、美紅色を呈す、背面も亦紅色を帯び毛を有す、子葉長一七・五耗、幅八・五耗、柄長九耗あり、軸は胚節以下三―四耗許あり稍々膨大性にして毛を有す、初め淡褐色、漸次褐色を呈するに至る。莖は胚節以上の部分にして地下に埋没する部分は淡黃色を帯び、白色剛性の毛密生す(特)、地上部は淡黃綠色に紫色を帯び、時に紫色を呈するものあり、(特)、白剛毛密布す、毛の著しきことは、カシハ及びイチヂクカシに比すれば劣るも之に次ぐの種類なり、此の毛の爲めに白く見ゆるもの少なからず、葉は第一對、時に第二對共對生、鱗片葉にして、第五葉目より互生葉となり、第八或は第九葉目迄鱗片葉にして、第九乃至第十葉目より眞葉となる、眞葉は二乃至四葉、莖の頂に群生し一と先づ生育を止む、莖の長さは種々なるも、通常一〇〇―一三〇厘の間を上下す。葉は尖頭漸尖、胸倒卵狀橢圓形又橢圓形、粗齒芽狀鋸齒縁にして、幼時兩面共白色剛狀毛密生し白く見ゆるは此種の特徴とす、表面の毛は漸次消失するも、裏面の毛は宿存す、托葉は針形にして多毛、長三―四耗あり。根は界線明かにして、主根著しく直走す、短かくして枝根(第二次)を有せる側根(第一次)稍々水平に密生す、初め淡色なるも老ゆるに従ひ漸次褐色に變じ、短かき縦の裂け目を生ずるに至る。

第一一七 うごぎ *Deutzia crenata* var. *crenata* Makino 虎耳草科 Saxifragaceae

子葉は薄質水平に開張、葉片は橢圓形、鈍頭鈍脚、柄を有す。兩面淡綠色、脈不明、全縁、表面に白色の星狀毛あり、(強「ルーベ」)(特)、長一、五―一、八耗、幅一、〇―一、二耗、柄長〇、三耗に過ぎざる極小形のものなり。胚節稍明。軸は圓く淡綠色にして、微紅を帯び、短毛あり、長さ僅かに二―五耗に充たざる小形の稚樹なり。莖は圓く淡綠色なるも漸次微紅を帯ぶるに至り、白色の星狀毛を有す(特)、新葉は初より對生葉にして、第一對は胚節を去る一―三耗の邊に生じ、猶ほ三―四耗を去る所に第二對葉を生ず、漸次着點の伸長すると同時に葉の大きさも亦増大す。第一對の葉は葉柄と共に長三耗、第二對目の葉は長五耗第三對目の葉は長七耗許あり、何れも鋸齒(*serrata*)を具へ學名に添はざる形態をなす。葉の表面並に裏面に白短毛密布す。根は主根發達せず、界線不明、細根系に屬し、屈曲多き性質なり(特)。

第二一八 ゆずりは *Daphniphyllum macropodum*, Miq. 大戟科 Euphorbiaceae

子葉は斜上し、後、前後に裏曲す、一一八圖b、子葉は厚質線形にして柄を有せず。頂微凸頭或は圓、時に凹むものあり、全縁にして縁邊厚く兩縁上に曲る性あり(特)、表面綠色、裏面帶黃綠色、平滑無毛、裏面縦の溝を有するものあり。胚節明にしてV字形をなす。軸は圓く下部に至るに従ひ、稍々膨大し、急に根部に及びて細く、根との分界點明なり、軸部は初白色、漸次綠色及び微紅色を帯び遂に紅色に變ずるものあり(特)、地下部は白色なり、軸長四五—五〇耗ありて無毛平滑なり。莖は圓く平滑無毛、初淡綠色なるも漸次紅色を帯ぶるに至り、暗綠色を呈するもの多し、白粉を敷く(特)、新葉は初めは對生葉にして、第一對目の葉は胚節を去る一二—一八耗の所に生じ、鈍頭狹胸長橢形の葉なるも、片側に大凸起を生じ、稀に二凸起を生ずるものあり、時に凸起の上部裂間深く彎入するものあり、第二對目の葉は、前對と直角に一二耗を隔てゝ生ず、第一對葉は兩側凸起を有するも、第二對目の葉は兩尖長橢圓形の葉なり、稀に凸起を有するものあり、葉柄は紅色を帯び、葉片の兩面淡綠色にして無毛、下面白粉を敷く。根は軸との界線明かにして淡褐色を呈し、主根あり、側根稍々太く枝根を有せず、粗根なり。

第二一九 いいぎり *Idesia polycarpa* Maxim. 椅科 Flacourtiaceae

子葉は水平に開張、子柄も亦水平なるも少しく斜上するもの多し。薄質、圓形頂凹み基部圓、全縁、兩面共に淡綠色なり、脈は主脈の外基部に近く左右二大支脈を出し頂に近づく(特)、裏面に短毛を認む、葉長六—七耗、幅七—八耗、柄長二—二・五耗なるも、割合に長く見ゆ、葉裏面竝に葉柄に短毛あり。胚節稍々明、圓周の一部を爲す。軸は圓く淡綠色漸次紅色を増加し淡紅色を呈するものあり、長一〇—一八耗に達す、莖は淡綠色漸次紅色を帯ぶるものあり短毛密布す。新葉は初め第一及び第二葉は對生、胚節を去る五—一二耗の所に生じ、第三葉より互生葉となる、卵形又は橢圓形にして鈍頭、鈍胸にして、邊側に三—四の鋭鋸齒を具ひ、上面は平滑光澤あり、葉柄は割合に長し、(強「ルーベ」にて檢すれば、普通の鋸齒は再び細鋸縁を爲す)。根は界線不明にして主根發育せず、其色半透明狀の淡色なり、側根は屈曲性にして稍々密生す。苗には一種の臭氣あり(特)。